

日本ボストン会 会報

発行者 日本ボストン会事務局

ご挨拶

京都・ボストン交流の会 会長榊原胖夫

京都・ボストン交流の会は1997年7月に設立されました。その後はほぼ毎月講演会や見学会をおこなってきています。毎回の参加者はそれほど多くありませんが、行事をたえず行うことが大切と考えています。

昨年秋には京都・ボストン姉妹都市提携40周年を記念し、親善訪問団を組織、73名の参加をえて、「日本舞踊とジャズ」の公演、京都の伝統文化・工芸の紹介をしました。いずれも多くのボストン市民の参加をえて盛会でした。そのほか京都とボストンの写真家を交流、それぞれの都市の写真展を行いました。親善訪問団の報告書も作成いたしました。

一見派手な活動をしているようにみえますが、会員数は200名ならず(京都在住以外の方の参加も大歓迎、東京の皆さまもどうぞ会員になって下さい。)予算規模は小さく、事務局のご努力は並たいていではありません。幸い会員の皆さまの熱心なご協力があって、事が運ばれています。

京都・ボストンの市民交流の歴史は古く、1979年には「京の町家」がボストンの「子ども博物館」に移築されました。工事関係者の大変なご苦労があっ

たと聞いています。京の町家はボストンの市民が直接京都の生活や文化にふれる機会を提供しています。

(年間の訪問者は50万人を優に超えているとのことです。ボストンへおいでになるときは、ぜひとも「子ども博物館」の中の「京の町家」を見てきてください。)

交流の会の集まりの多くは京都市が建設運営する国際交流会館で行っていますが、会は基本的にはN G Oです。しかし中学・高校の生徒や教員の相互交換事業など、市や政府がおこなう有益な事業には協力を惜しまない姿勢でいます。

交流の会は京都文化の輸出につとめるとともに、ボストンのことをもっとよく知り、ボストンから学ぶことも強調しています。知り学ぶ姿勢がないと交流事業は長続きしません。

過日、東京の日本ボストン会の高木会長が、われわれの総会に出席してくださいました。東京との協力関係を確かなものにしたというのは京都側の考えでもあります。今後のご厚誼をお願い申し上げます。

総会・懇親会のお知らせ (同封ちらし参照)

日時: 平成12年11月10日(金)午後6時開場、午後6時半開会。

場所: NEC三田ハウス芝クラブ(JR田町駅、都営地下鉄三田駅下車)

港区芝5-21-7、☎03-5443-1400

出席者: 当日払い お一人6000円/同伴者5000円

事前送金 お一人5000円/同伴者5000円

送金方法: 銀行送金

「日本ボストン会」

申込み先: 日本ボストン会事務局 (同封葉書、又はE-mailにて10月31日までにお知らせ下さい)

欽桜会(平成12年4月2日)

24名参加の大観桜会(千鳥が淵)

藤盛紀明・富美子

2回も現地を下見し、五分咲きにはなるのではと期待したにも拘わらず三分咲きで迎えた桜でしたが、大いに盛り上がった一夜でした。

名残惜しさは昨年と同じで、食事のあとも会話に花が咲き、皆さん遅くまでホテルのロビーに残られました。花よりダンゴの話ですが、食事の場所は昨年と同じ新装なった九段グランドパレス地下のレストラン「バイキング」。ここのローストビーフは最高との評判で、席について早速直行したら、シェフ曰く『ローストビーフは逃げないからゆっくりどうぞ』と言われてしまったのは大失敗。

参加者は2000年も24人で、黒沢敏夫・美和子ご夫妻は初参加でしたが、大変エンジョイされ、宴会のスピーチでも皆さんを盛り上げて頂きました。ウエルズリーカレッジでカウンセラーをされ、帰国直後であった森裕子先生も初参加され大変エンジョイされました。伊藤敦子さん、幸野真士さん、佐藤文則さん、高野忠義先生も初参加されました。

ボストンから帰国された方が日本ボストン会の会合に初参加するにはこのお花見の会はリラックスして皆さんとお話出来るので最高でしょう。

観桜会では篠崎プロの写真が名物ですが、今年は三分咲きとあって、腕の奮い場所が少なく、このことが唯一心残りでした。篠崎さんは東大に学士入学されましたから、「桜咲く」はおめでたいことですので、2001年の写真に期待したいと思います。

今年は「桜」をターゲットにしているホームページの一つをコピーして皆さんに配布しました。このHPには桜の名所10カ所が紹介されています。勿論第一番は千鳥が淵ですが、井の頭公園、幸手市権現堂桜堤などが紹介されています。

私の好きな桜の名所は弘前城、姫路城、新京成線の常磐平などですが、日本ボストン会の大観桜会は2001年も千鳥が淵です。日時は満開を期待して4月8日のお釈迦様の日、集合場所は同じフェアモントホテル前です。是非参加してください。

ハイキングの会(平成12年4月22日)

緑のさくらを尋ねて(多摩森林科学園)

篠崎和子

4月22日は心配していた2日続きの雨も上がり、絶好のお花見日和となりました。ご参加の皆様が定刻の午後1時には全員がJR高尾駅北口にお集まり下さり、「多摩森林科学園」には徒歩十分余で到着しました。(注 休園日は毎週月曜日と年末・年始)

当日は大変混んでおりましたが、園内が広いので、のんびりと森林浴も兼ねたお花見ができました。

園内の桜の種類は約250種もあり、丁度時期が良く、一部を除き、殆どの種類を見ることができました。桜には素敵な名前が付けられていて、その花を見ると、なる程と感心したり、感動しながら夫婦だけで、或いは友人と約3時間の散策となりました。

特に緑色の桜 — 御衣黄(ギョイコウ)と鬱金(ウコン) — はこの園の呼び物でしょう。いろいろな桜が植えられており、且つ丘陵地の試験林ですから、各種の樹木、山野草、鳥を見ることが出来ます。毎春訪れたいと誰もが感ずることと思いました。

参加者の中には「花より団子」の方もいらしたでしょうか?花のあとは勿論お楽しみの食事です。

「多摩森林科学園」は4時に閉園になります。高尾駅まで徒歩で戻り、高尾駅より高尾山口迄京王線を利用し、駅前から専用送迎バス15分で目的地の「うかい鳥山」に到着しました。

「うかい鳥山」は東京にこんな所があると思えない深山幽谷に囲まれていました。丁度、庭の水芭蕉も咲いていて、甘酒を飲みながら鑑賞することができました。

いよいよお待ちかねの夕食です。竹林の中に囲まれた離れ風のお座敷で、薩摩地鶏の炭火焼きコース、それぞれ季節の前菜から美味しく戴き大満足でした。お酒のお好きな方々には、青竹筒に入った日本酒のお味も格別だったことでしょう。

帰路は専用送迎バスで京王線高尾山口駅に戻り、家路につきました。

風のない最高の日和に興奮すら覚えたお花見を楽しみ、且つ美味しいお食事が出来た幸せに感謝した一日でございました。(当日の参加者23名)。

ボストン日本語学校と創立25周年記念事業

第8代ボストン日本語学校運営委員長

創立25周年記念事業実行委員長

滝沢 典之

日本ボストン会の皆様、この度のボストン日本語学校創立25周年記念事業に際しましては、多大なご寄付をはじめ、ご指導、ご支援を賜りまして、誠にありがとうございました。

お蔭様で2000年6月末の時点をもちまして、当初の目標額は集めることができましたが、もしお志をお持ちの方がおられましたら、下記の口座宛にご送金の程お願い申し上げます。この貴重な資金は今秋開催の25周年記念ブックフェアバザーの収益金と合わせて図書の実用をはじめとする教育設備充実のために使用させていただくことになります。

本校は増淵興一初代校長先生(第2代ボストン日本人会会長/現名誉会長)、小久保武事務局長(現ボストン日本人会会長)を中心に、諸先輩関係者の皆様のご尽力により、1975年6月に25名の生徒で開校しました。現在は600名を越える児童生徒が在籍しています。

小職もボストン在任中(1994年3月~2000年6月)、運営委員として教職員の面接採用、学校行事の準備、学校運営に携わる貴重な経験をさせていただきました。「主役は児童・生徒、脇役はPTAと教職員、舞台作りをやるのが運営委員」という精神で、仲間の運営委員と夜中まで議論し、午前様になることもしばしばでした。

本校はメドフォード高校の校舎をメドフォード市のご好意で25年間借用させていただいています。北米の補習校でこれだけ安価で長期にわたり安定して校舎を借用している本校は非常に恵まれた稀な存在です。「常に感謝の気持ちをわすれずに」またその気持ちを行動に移すことが大切であると思います。

今回の25周年記念事業の特色は、保護者、教職員、関係者のボランティアの力を結集していることです。ボランティアの知恵を絞り、汗をともに流し、いろいろな企画や行事を協力して進めるという基本思想を実践してきました。昨年、実行委員会のもとに12の小委員会(①財務、②記念誌、③記念式典、④オープンハウス、⑤記念品、⑥同窓会・OB、⑦ホームページ、⑧教育設備、⑨音楽文化、⑩日米交

流、⑪スポーツイベント、⑫図書館開設10周年ブックフェア)が発足、活動を展開いたしました。

本年4月8日土曜日の入学式当日に「創立25周年記念式典」を開催し、ノーベル賞受賞者であります利根川進MIT教授(本校PTA)の記念講演を皮切りに、午後のレセプションとさまざまな記念行事を執り行うことができました。

利根川教授の記念講演は「人生をどう生きるか」という演題で、日本語学校の生徒や保護者を前に、ご自身のご経験を判りやすくお話し戴きました。小学生時代、友達と野原で野球をしたり、川で魚釣りをしたりして泥まみれになって遊んだこと。愛知県の中学時代は秀才で通っていたものの、東京の日比谷高校時代はまわりの秀才たちに比べ、それ程目立つ存在ではなかったこと。一浪後、京都大学に入学、初めて生物学に興味を持ち、一生懸命研究に没頭したこと。米国とスイス留学の研究でノーベル賞を受賞したこと。これらのご経験から、「興味があり、好きなことを続けることの大切さ」のお話でした。また、日本の画一的な教育よりも米国の個性尊重教育の重要さも説かれました。

レセプションでは、小久保日本人会会長、安武日系企業懇話会会長、メドフォード教育委員会の社会教育指導主事であるレノン氏、そしてメドフォード教育長のベルソン氏から、それぞれお祝いのお言葉や学校開設時のご苦労話などをお話し戴きました。

今回の創立25周年行事は「21世紀の教育のスタート」でもあり、「未来への飛躍のジャンプ台」でもあります。保護者、教職員、運営委員会が協調連携し、主役である子供たちが世界に羽ばたく上で、日本語や日本文化、歴史を学び、広い視野を持った「21世紀の地球人」として本校を巣立って欲しいと願っています。そして、本校に学んだ「21世紀の主役達」の心の中にきらりと光る輝きがいつまでも残るような「世界一のボストン日本語学校」にしていきたいと思います。

今後とも関係の皆様のご支援とご鞭撻の程、よろしく申し上げます。

Sister State Affiliation Seminar(姉妹提携10周年記念セミナー)

“10th Anniversary and Me”

a lecture by Dr. David C. Knapp

former president of Japan Society of Boston

Good afternoon. I wish to thank the Society and the Asahi Gakuen Educational Foundation for inviting my wife Rita and me to join with you. We are specially pleased to be here for the beginning of the 10th anniversary of our sister-state agreement, and to invite you to join with us in September for our commemoration.

Two months ago, Mr. Nakagaki suggested that I speak today on “Me and Hokkaido.” Over 17 years has become a lengthy tale, so this afternoon I shall offer only a brief summary of my introduction to Hokkaido events related to the sister state agreement, a few personal reflections, and finally some thoughts about the future.

Introduction

I came to Japan for the first time in the autumn of 1983 to attend a conference celebrating the anniversary of the opening of Tsukuba

University near Tokyo, and to learn first hand about the exchange agreements between the University of Massachusetts and universities and colleges in Japan.

I knew little about Hokkaido when I came - something about William S. Clark's work here in 1876, something about the Sapporo Winter Olympics. My education began quickly under the tutelage of then President Arie of Hokkaido University. He and the university staff acquainted me with the university, Sapporo and its outlying areas, including Lake Shikotsu.

Some days, later I left with appreciation of how much Hokkaido and Massachusetts had in common - in landscape, history, and educational interest. As reminders of the visit, I carried home a book of photographs and paintings, entitled “Mountains which can be seen from Sapporo,” given to me by President Arie, and a necklace of lacquer on tortoise shell which I had purchased as a gift for my wife.

北海道・マサチューセッツ州姉妹提携10周年記念関連行事一覧

北海道で実施するもの

- 1 姉妹提携10周年記念マサチューセッツセミナー(2000年4月7日 札幌)
- 2 ボストン東スクールジャズオーケストラコンサート(2000年6月3日 旭川)
- 3 学生美術交流展・北海道ポスター展(2000年10月24~29日 旭川)
- 4 経済開発セミナー(2001年2月 札幌)
- 5 マサチューセッツ州写真パネル展と児童絵画展(2001年 札幌)
- 6 マサチューセッツ州からの訪問団受入れ(2001年2月 北海道)

マサチューセッツ州で実施するもの

- 1 マサチューセッツ州訪問団の派遣(2000年9月10~17日 マサチューセッツ州)
- 2 文化交流行事(2000年9月11~13日 ボストン スプリングフィールド)
- 3 学生美術交流展・北海道ポスター展・写真展(2000年9月11~24日 秋ソ 7MA-スト)
- 4 経済開発セミナー(2000年9月12日 ボストン)
- 5 高P連・高校生と親と生徒の国際交流事業(2000年10月10~18日マサチューセッツ州)

その他

- ・ 姉妹提携10年史の発行(2001年3月)

Sister State Affiliation Seminar (Continued from page 4)

I thought of them as unique symbols of a once-in-a-lifetime occasion.

That was not to be. I have been back to Japan nine times, seven to Hokkaido. In fact, in the past decade, I have landed at Narita more than at any other airport outside of the United States. I have become deeply engaged with Japan, first with our sister-state agreement and then as president of the Japan Society of Boston. All told, my first journey was a life changing experience.

Sister-State Agreement

In the seven years after 1983, all my contacts with Hokkaido took place in Massachusetts. President Arie came to the University of Massachusetts in 1985, and Kitty Dukakis, wife of our Governor, came to Hokkaido in the same year. The idea of a sister-state relationship emerged. Early in 1987, I became chair of the committee to plan and promote a sister-state agreement, with Pat Givens of the State's International Trade Office as staff. Over the next two years, we were very fortunate to have, as the Consul General of Japan in Boston, your current ambassador to Moscow, Mr. Tamba.

As many of you will recall, in these years visits between our two states multiplied. As chairman of the sister state committee, I presided at many occasions, met literally hundreds of men and women from Hokkaido - professors, teachers, parents, professional women, marathon runners, artists, businessmen, political leaders, and journalists. As President of the University, I was able to award honorary degrees to some of your eminent people. Rita and I enjoyed having friends from Hokkaido in our home and at my Club in Boston.

Clearly by 1990, the time had come for the sister-state agreement. I was honored to return to Sapporo, with Rita, to represent the Commonwealth and Governor Dukakis at the two-

way televised signing ceremony. Other official visits followed. I accompanied William Weld in 1991 on the first visit of a Massachusetts Governor to Hokkaido, and returned later for biennial discussion on the agreement. I was honored later to represent the Commonwealth on two more occasions: the Historical Museum opening of the Lyman Collection exhibit, a project dear to the heart of Mr. Kashihara, and then again on the 5th anniversary celebration of the 1990 agreement, with its *Mayflower* snow sculpture.

Reflections on the Past

Let me note some of the developments of the past decade which give me special satisfaction. Exchange agreements between academic institutions have increased in number, as have sister city agreements and those between organizations, such as the education boards and the cooperative agreement between the Northern Regions Center and the Massachusetts Centers for Excellence. Massachusetts teachers have been here to observe classroom education at first hand.

Discussions have taken place on policy areas which I have thought for Hokkaido-biotechnology, the aging population, and telecommunications in schools. Students, teachers and parents have come to attend the Hokkaido International Junior Art Camp. Art and music had an important role on a number of occasions, such as the woodblock demonstration in Boston on the 5th anniversary. Unfortunately we have not made progress on economic and trade relationship, but it remains on our sister-state planning agenda.

Over 17 years, thanks to generous and thoughtful hosts, I have had the good fortune to travel and expand my knowledge of Hokkaido. I have spoken at the Law School and the International Exchange Center at Nanae, engaged in discussion on university education at

(Continued on page 6)

Sister State Affiliation Seminar (Continued from page 5)

several institutions, visited Otaru, Hakodate, and finally guided by Mr. Yamashita, Daisetsuzan National Park, where by a waterfall I renewed, by chance, my acquaintance with the gentleman who brought to us Hokkaido's gift for restoring the Lyman Collection and building the Clark Memorial Park in Amherst.

Rita and I have many memories of these visits scattered throughout our home, most especially gifts of lacquer ware, textiles and weavings, woodblock prints carved wood and stone, and classical music recordings, and because we are collectors by nature, glass paperweights and birds, books, and some very special bookmarks.

Many people have made us feel at home in Hokkaido. Among them, officers members and staff of this Society and the Northern Regions Center; the translators who have endured my speeches, one of whom helped me locate a gorgeous book on Japanese mushrooms for my wife; and others whom we have met in chance encounters.

Several people deserve special mention. Governors and Mrs. Yokomichi and Hori have been gracious in person and in their interests in the sister-state relationship. I especially pay tribute to the memory of Mr. Kashihara who, whether riding a cross-state bus in Massachusetts or hosting a spectacular Japanese meal, was a splendid companion. Rita and I have enjoyed and benefitted from the hospitality and generosity of President Asahi and his family, both here and in Boston. Our discussions on academic planning have been stimulating and rewarding.

The Future

Over the years I have seen many educational and cultural exchanges come into being. Most begin with enthusiasm. Some prosper: More become dormant for long seasons. In Massachusetts few have been as vital as those with Hokkaido. Our sister-state agreement has stood the test of time.

We look forward to all of you - as well as Hokkaido art and music - coming to join with us in Massachusetts in September to celebrate our sister-state accomplishments, and most especially to define our future relationships. Programs are planned for both Boston and Amherst. In this 10th anniversary year, we in Massachusetts and you in Hokkaido have a very special opportunity - to extend and strengthen our long historical relationship along both old and new paths, far into the foreseeable future.

Let me thank all of you for your friendship, hospitality, and generosity. As I retire from my Japan-related roles in Boston, I want you to know that you have become a significant part of my life since I first stepped off that plane seventeen years ago.

(注 北海道・マサチューセッツ協会英文会報 "HOMAS" Newsletter No.10 April 2000より転載)
(今年の総会で、9月のマサチューセッツ訪問団の結果を中垣正史HMS事務局長より伺う予定です。)



▲ From Left to Right: Akio Matsue, Vice President of HMS; Yumiko Yokomichi, Former Governor's Wife; Mikio Arie, Honorary President of HMS; Dr. David C. Knapp; Rita Knapp; Masao Morimoto, President of HMS; Mie Abe, Vice President of HMS; Masafumi Nakagaki, Director & Secretary General of HMS; Juichi Takahashi, Director of Intl. Div., Hokkaido Asai Gakuen Univ.

Paul Guillaumeコレクション展 —ルノワールからピカソまで— 於Montreal美術館

今夏訪れたMontreal美術館では6月1日からPaul Guillaumeコレクション展が開催されていた。幸いにも6月中旬、そして8月と二度作品に再会することが出来た。

美術界にとって偉大なコレクターの存在は大きい。20世紀、特に後半に入ると、個人コレクターは少しずつ公的機関に代って、芸術を擁護する美術愛好家となり、又、美術館で展覧会を開催し、更に増加する傾向にあり、美術館へ作品を寄贈する様になって、彼らは大衆との橋渡しを担う様になってきた。

Montreal美術館での展覧会は、19世紀後半から20世紀初めのGuillaume(1891-1934)フランス絵画コレクション展であった。

質の高さを保つ彼のコレクションは、彼の死後、Orangery Museum(Paris)(オランジュリー)に永久に保存されている。

そのOrangery Museumからの81作品は、Renoir(ルノワール)(1841-1917)からPicasso(ピカソ)(1881-1973)までの時代の11人の画家達の傑作である。

印象派の画家達はすべてのコレクションに加えられて、この展覧会では、1872年初めパリジャンが舟遊びするリゾート地Argenteuil(アルジャントゥイユ)に移住し描かれたMonet(モネ)の作品が見られる。Renoirに関しては16作品がこのコレクション展に展示されている。

近代絵画の始まり、そして20世紀美術を宣言し、更に代表作の一つでもあるCezanne(セザンヌ)のLestaque(レスタック、マルセーユ湾に面した小さな漁村)の松の木がある。見るものに迫って来るような前景では、近くにあって動きのあるいろいろなものからなる世界が捉えられている。伝統的な描き方を放棄して、平らな面とか、暖色と寒色のコントラストを重視している彼は、この頃すでに印象派と距離を保っていた。その他、15作品の内の作品がキュビズムを生み出すことになる。

Rousseau(ルソー), Matisse(マチス), Modigliani(モジリアニ), Soutine(スーティン), Laurencin(ローレンシャン), Utrillo(ユトリロ), Derain(ドレイン)▲

ゴルフの会

次回懇親会は名門泉CCで開催

今年第1回のゴルフ懇親会は6月8日に、山梨県サンメンバーズカントリークラブで開催され、10名が参加しました。その結果:

- 1位 近藤宣之 (ネット72、グロス82)
- 2位 藤盛富美子(ネット73 グロス109)
- 3位 高木政晃 (ネット77 グロス98)
- BB 吉田久夫 (ネット92 グロス116)

オーストラリアから戻られた當間さんが久しぶりにご夫妻で参加されました。

今回は10月26日、千葉県の名門コース、泉カントリークラブで開催されます。藤盛さんのお世話で特別な料金でプレーできますので、今回は4組16名が一杯になることを期待しています。

参加費 18,000円見当。(プレー費および賞品・パーティ代)。

地図: 参加者宛に案内図を差し上げます。

お申込みは近藤まで。

秋の美術鑑賞(箱根)および 箱根旧街道を巡る(1泊2日)

日時: 11月25/26日(土/日)

ホテル: 箱根ホテル, or同クラス(1泊2食 2万円余)

訪問先: 成川美術館、箱根芦ノ湖美術館、

(又は箱根彫刻の森美術館、箱根美術館)。

箱根旧街道: 旧街道一里塚、見晴らし茶屋、旧街道資料館、甘酒茶屋、旧街道杉並木、関所。

集合場所: 箱根湯本午前10時半頃。

申込締切: 10月25日

申込先: 酒井一郎

Paul Guillaumeコレクション(続き)

に続いて、最後の作品はPicassoの作品で展示は終了する。

夏休みのせいか、館内は6月よりも子供連れの人が多く、父親の説明にじっと耳を傾ける少年少女達の姿が印象的であった。

Sep. 11, 2000 美術愛好会 酒井典子

幹事会報告

2000年5月15日(月)出席者(17名)

- *挨拶
當間さん帰国
佐々木さんMITおよび近況報告
- *お花見の会 4月2日(日)(別項参照)
次回は2001年4月8日(日)
- *ハイキングの会 4月22日(土)(別項参照)
- *音楽の会
ジュリアード留学中の中野翔太君が斉藤記念オーケストラで演奏
- *ゴルフの会6月8日(木)10月26日(木)(別項参照)
- *歴史出版計画報告
200冊印刷。残部28部。収支ほぼ同じ。
- *レディーズ会
杉原千畝氏の顕彰碑除幕式は4月30日に举行された。式典ビデオが送られてきた。(会報#15参照)
- *北海道・マサチューセッツ州提携10周年記念事業(別項参照)
9月10-17日マサチューセッツ州に訪問団派遣予定。
日本ボストン会として協賛金支出承認。
- *京都ボストン交流の会
高木会長が6月に京都を訪問予定。
- *会報発行
9月末発行予定。(原稿締切り8月末)

2000年9月12日(火)出席者(16名)

- *高木会長の挨拶。
京都ボストン交流の会を6月、7月に訪問、同会の活動状況を報告(榊原会長寄稿の項参照)。
- *茂木次期会長の挨拶。
- *幹事会の新出席者の紹介。
滝沢典之さん、山崎さん。
- *ストリ日本語学校25周年記念事業報告(別項参照)
- *総会の準備(11月10日開催)
北海道マサチューセッツ協会(中垣事務局長出席予定)
京都ボストン交流の会(高木会長よりお願いする)
- *名古屋ボストン美術館の近況
常設展示「古代地中海の美術」2004年春迄。
5F「日本の顔-関野準一郎の木版画」10.31/2.25.'01
- *「ピーボディ・エセックス博物館」探訪ツアー(別項参照)
- *秋の美術鑑賞・箱根旧街道ツアー(別項参照)
- *新入会員2名(小林淳一さん、滝沢典之さん)
- *次回幹事会(12月5日午後6時半)

「日米交流のあけぼの展」
ゆかりの地 探訪ツアー

昨年秋、東京で開催された「日米交流のあけぼの展」を共催したピーボディ・エセックス博物館では、本年11月17日から、同展のアメリカバージョン展の開催を予定している。

この機会に、同展のオープニングと博物館バックヤードツアーを計画している。参加者を募集中。

*期日：2000年11月15日出発、10日間程度の予定。
*訪問地：

- (マサチューセッツ州セーラム)
「ピーボディ・エセックス博物館」
「日米交流のあけぼの展」開催式典・パーティ
日本関係資料展示・収蔵庫見学
セーラム市周辺観光
- (ボストン)
「ボストン美術館」、米国建国関係の名所
(ワシントン オプション)
「スミソニアン博物館」
ホワイトハウス、国会議事堂等。

*人数：10人以上。
*費用：お一人約35万円(詳細は申込先照会)
*申込先：関直彦

米MIT教授田中豊一氏急逝

こんにゃくやゼリーのようなぶよぶよな物質「ゲル」の研究の第一人者として知られる米マサチューセッツ工科大(MIT)教授の田中豊一(たなか・とよいち)氏が5月20日、心不全のために急逝した。54歳。テニス中に心臓発作が起きたという。

新潟県長岡市生れ。東京大学で物理学を学び、MIT助教授などを経て、1982年から同教授。仁科記念賞、東レ科学技術賞など多くの賞を受けた。

近年は、生命の起源に迫る研究にも着手。原始地球ではアミノ酸が連なってたんぱく質ができたが、たんぱく質がなぜ特定の構造を取ったのか、などのなぞを解明するため、ゲルの原理を使った理論づくりと実験に取り組んでいた。

日本ボストン会ではご遺族に弔電を打ち、哀悼の意をお伝えしました。